きい葉をつけることでよく知られている。ちょうど日本のササクサに似た植物である。

**肉質の大きい果実をつける竹**

東インドに産する⑲メロンカンナ　バンブソイデスという竹は花後に出来る果実が竹類ちゅう、最大で、直径8～12cm.もあって、リンゴのような形をしていて、果皮が肉質である。土人はビーテルナットのように美味であると言い、好んで焼いて食用にする。また、ビルマの⑬メロカラムス　コンパクチフロルスも果実がリンゴ大で、肉質の果皮をもち、前種と同様、食べられるのである。ところが、日本では竹よりも笹の種類がよく結実するが、総て小型で果皮が薄くて種子に癒着し、いわゆる顆果で、コムギ、オオムギ粒ぐらいの小粒ばかりである。（「竹と笹」289ページ竹笹の果実をみよ。）

**タバシール（たけみそ）の出来る竹**

日本の本草書に⑳たけみそ、漢名、天竹黄のことがよく書いてある。この天竹黄は③南洋刺竹バンブサ　アルンジナケアと⑲メロカンナ　バンブソイデスなどの4、5種の稈の中にのみ出来るものである。日本にはバンブサ属やメロカンナ属の竹を産しないので、和産のたけみそはない。これらの竹類はインドシナ、ボルネオ、マレー、海南島などに産し、いずれも稈が叢生していて、竹稈ちゅうに多量の硅酸を含み、その節間中にときたま硅酸質の固形物が出来ることがある。これを天竹黄（タバシール）と言い、強壮剤や催春剤として古くより薬用として貴ばれてきた。本品は他のいかなる属の竹稈中にも知られていない。

なお、上のものの外に、結節が螺旋状にぐるぐる廻りながら伸長するラセツチク（メダケの変りもの）のような畸型が時たま現われるが、決して種類が一定していない。また竹の皮の表面の刺毛に激毒を含み、コーヒーの中に一匙を入れると死亡すると言われるものなどがあると書いたものがあるが、真疑のほどが疑わしいのでこの辺でペンを擱く。

註

① クスクエア　アリスタタ
*Chusquea aristata* Munro
② デンドロカラムス　ギガンテウス
*Dendrocalamus giganteus* Munro
③ バンブサ　アルンジナケア
*Bambusa arundinacea* Willd.
④ バンブサ　ツルダ　*Bambusa Tulda* Roxb.
⑤ ギガントクロア　ロブスタ
*Gigantochloa robusta* Kurz.
⑥ デンドロカラムス　ブランジシー
*Dendrocalamus Brandisii* Kurz.
⑦ ニイタカメダケ
*Indocalamus niitakayamensis* Nakai
⑧ レレバ　ライ　*Leleba Wrayi* (Stapt.)
⑨ リマツルダケ　*Schizostachyum lima Merr.*
⑩ ネオホウゼアナ　ズルローア
*Neohouzeana Dullooa* A. Camus
⑪ ブルメツルタケ
*Schizostachyum Blumei* Nees
⑫ ツルタケ　*Schizostachyum diffusum* Merr.
⑬ メロカラムス　コンパクチフロルス
*Melocalamus compactiflorus* Benth. et Hook.
⑭ ヒマラヤダケ　*Arundinaria falcata* Nees
⑮ デンドロカラムス　ペンズルス
*Dendrocalamus pendulus* Lidl.
⑯ デンドロカラムス　パテルラリス
*Dendrocalamus patellaris* Gamble
⑰ ジノクロア　エルメリ
*Dinochloa Elmeri* Gamble
⑱ グアデルラ　ロンギホリア
*Guadella longifolia* Cammsin
⑲ メロカンナ　バンブソイデス
*Merocanna bambusoides* Trin.
⑳ たけみそ、漢名・竹黄、天竹黄、竹膏、竹脳、竹糖、英名 Tabashir, Bamboo manna

---

## 新刊紹介

# "竹と笹"

室井綽著

先般、井上書店から、室井綽著「竹と笹」の本が刊行された。

本書は、氏の過去25年にわたる収集研究の中から書き留められた、竹と笹に関する論説を集めたものである。

こういう専門書は、如何かすると固苦しくなりがち

で、何か親しみうすく、つい敬遠しがちなものであるが、挿画も多く、文章も随筆風に書かれていて、専門書としては勿論ながら、素人にもまた興味深く読める好著と言えよう。

これは著者が「象牙の塔」の人でなく、いつも足をもって学びとり、本当に大衆の為の生物学を志向しているからである。それに書中には、なかなか面白い話も多い。バンブーが竹でないとか、松山市の名寺太山寺の山門内にあるねじれ竹は、よなよなひそかにタイサンチクの若い筍に支柱を巻きつけてねじれを作り、伝説と結びつけたということをすっぱぬいたり、明治35年の、あの八甲田山の軍隊遭難の悲惨な大事件の原因が、チシマササのためであったというように、いかにも生物学者らしい真相も紹介されている。

話は文学の方面にも広がり、万葉集の竹笹の歌に関する論文も出る。有名な「猪名の笹原」（武庫野）のササに著者独自の見解も表され一読に値する。また神戸の水害と六甲山の関連性も、治水学上大きな示唆を投ずるものであろう。

また、庭園、茶室、竹細工などの日常生活にとり入れられた竹笹のおのおのが分類学的にどのような性質のものであるかについて、素人にもわかるように、各題にわたって広く話題を集めたところなど分類学者としての苦心がうかがわれる。竹笹以外の高等植物の分類分野にも明るい著者の頭の中にはあらゆる方面からみた分類の基準が用意されていてつきるところを知らない。

「日本竹笹類の大別」「和名の語源しらべ」や「有用竹類とその見分け方」「竹笹の果実」「園芸竹類と工芸竹類」においては著者の竹笹研究25年で体得したエキストラクトが画かれており、有用竹について今まで以上の興味と親しみとを感ぜさせずにはおかない。また「マダケ、ハチクは日本の原産」「日本産竹笹の特異性」や「二叉竹の成因」などの論説においては、その事実への理論づけに関して著者の豊富な体験と、独創力のたくましさとが如何なく発揮されており特に感銘の深いものがある。

専門書として、また普遍性もある書物としてここに推薦する。　（江越千代子）

……この度、「採集と飼育」に御著の広告を見まして早速註文しました処、一昨日到着しました。丁度少々発熱気味で床中にありましたので、どうせ分類学者の著書だから頭がいたくなるに定っているが、まあ新刊書の味と香はそのままに過すわけも行かず転読をしてみますと想像とは異り面白そうだと取りついて読み出した処。頭の痛さは、それとして中食時を一寸休み一気に読了してしまいました。実に興味深く私のように竹笹について知識のない小生が一気に読み通す程の魅力を覚え、今後私の机上に常備させて戴くものとなると存じます。いらぬおせっかいと存じますが、この書は分類学をやる者は勿論、採集家、文人詩歌人、文学者、随筆家、園芸家など、またはその道外の素人が読んでも面白い肩のこらないものと思われます。このうち１、２について申させていただきます。

タケニグサの実験、万葉歌シノの新考、竹類の盆栽法、また戸隠山の採集紀行、大台ガ原に於ける修験者の篠懸考、など総べて著者の竹と笹の生活の中からにじみ出た考察と発見であること。

ヤダケの果実１個を得る為の20年間の苦行、コウヤアズマササに会うための高野山ゆき、長塚節の竹栽培法を古本屋から持ち逃げるようにひったくり電車の中までの気持などよく同好者の気持ちを描写しているほほえましさ、挙げれば特記事項で終始されています。

これの書物で誰にも興味深く読まれるものは、ともすればピンボケのするものですが御著は多方面にわたって記述がされ材料が採られているが、それが要点は「竹笹の分類」に綴られていて、しかもその点においては一歩も本分のごまかしも容赦もしない厳格の一線が引かれている点には一種おそろしさが感じられました。

この書で特に深く思わせられることは特に分類学者は実験しなければならないこと、先生の採集行きの時には厳寛ユーモアーが自在に織なされ、それが人生観となられ更に民族を愛し、我が日本の国土を愛する国土経営の方面にまで発展して行かれるのであろうと思われることで御座います。……（中谷六郎）

Ａ５版、上製、350ページ、プレート４、挿図56、定価、650円、昭和31年、井上書店発行
（東京都文京区森川町79）